

## 神が黙っておられるなら

ヨブ記 34 章 1-37 節

### はじめに

月の第四週に私が説教をさせていただく時には、旧約聖書の「ヨブ記」からお話することになっています。今日は 34 章から学びたいと思いますが、久しぶりに「ヨブ記」を学ぶので、少し振り返ってみましょう。

### 1. ヨブの試練と信仰

ヨブは、誠実な心を持っていて、神様を愛し悪から遠ざかっている人でした。神様は、そんなヨブを祝福して、多くの財産と多くの子どもたちを与えられました。

しかしそんなヨブに、サタンが目を留めて、神様にこう言うのです。「ヨブは、あなたに祝福されて、多くの財産と多くの子どもたちに恵まれているから、あなたを愛しているに過ぎません。もし財産と子どもたちを失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるに違いありません」。

そこで神様はサタンに、ヨブの財産と子どもたちを奪うことを許可しました。するとヨブは、犯罪や自然災害に巻き込まれて、一日のうちにすべての財産と子どもたちを失ってしまうのです。

しかしヨブは、そのような試練の中でも、決して神様への信仰を失いませんでした。彼は、神様を礼拝してこう言うのです。「私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」(ヨブ記 1:21)。

するとサタンはもう一度、神様にこう言うのです。「ヨブは、財産と子どもたちを奪われても、健康に恵まれているから、あなたを愛しているのです。もし健康を失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるに違いありません」。

そこで神様はサタンに、ヨブから健康を奪うことを許可しました。するとヨブは、足の裏から頭のとっぺんまで、悪性の腫物で侵されるのです。夜眠れないほどの痛みがあり、やせ細っていきます。内臓も侵され、それが原因で体から悪臭が出るようになりました。その結果、人々からも避けられ、ゴミのように扱われます。そして妻からも、「神を呪って死になさい」(ヨブ記 2:9)と見捨てられます。

しかしヨブは、そのような試練が続く中でも、神様への信仰を失いませんでした。彼は、妻に向かってこう言うのです。「あなたは、どこかの愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざいをも受けるべきではないか」(ヨブ記 2:10)。

ヨブは、財産を失い、子どもたちを失い、健康も失い、妻からも見捨てられてもなお、

神様への信仰を捨てなかったのです。これがヨブ記 1-2 章に書かれている内容です。

## 2. 三人の友人たちによる「因果応報」による災いの解釈

ヨブには、三人の友人がいました。エリファズ、ビルダデ、ツォファルの三人です。彼らはヨブが災いの中で苦しんでいると聞いて、ヨブを慰めるために駆けつけます。彼らは最初、ただヨブのために涙を流し、七日間（一週間）一言も語らず、ヨブのそばに寄り添い続けたのです。

しかし三人の友人たちは、ヨブと会話を交わし始めると、次第に態度が変わっていきます。ヨブ記は全部で 42 章ありますが、3-27 章までがヨブと三人の友人たちとの討論の内容が書かれています。その討論のテーマは、ヨブの災いの原因は何かというものです。

三人の友人たちは、ヨブの災いの原因を「因果応報」の原理で解釈して、ヨブを諭そうとします。「因果応報」とは、人は必ず自分の行いによって報いを受けるというものです。三人の友人たちは、ヨブの災いの原因は、ヨブの罪にあると考えます。ヨブが何か大きな罪を犯しているから、このような大きな災いに遭っているのだと考えたのです。だからもし、ヨブが自分の罪を認めて神様に悔い改めるなら、災いは終わり、神様の祝福を取り戻せるに違いないとヨブを諭そうとするのです。

## 3. ヨブの問題点

しかしヨブは、三人の友人たちの考えに納得できないのです。ヨブは神様に愛され、自分も神様を愛し、そして隣人をも愛してきたのです。ヨブには、このような大きな災いを受けなければならないほどの大きな罪があるとは、どうしても思えなかったのです。もちろんヨブには全く罪がなく、完璧な人間だったわけではありません。ヨブも私たちと同じ人間ですから、確かに罪がありました。しかしヨブは、自分の罪を神様に隠すことなく、神様の前に告白し、赦しを求めたのです。そして贖い主に頼り、いけにえも献げて、罪の贖いをしてきたのです。神様からも、「**彼のように、誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている者は、地上には一人もいない**」(ヨブ記 1:8)と言われるほど、ヨブと神様との関係に問題はなかったのです。

それなのに突然、神様との親しい交わりを失い、祝福された人生を失い、大きな苦しみに襲われ、孤独と絶望のどん底に突き落とされたのです。ヨブは、神様とサタンとのやり取りを知りません。ですから神様がなぜ自分をこんな目に遭わせるのか、なぜ神様が沈黙を守っているのか、なぜ御手を動かしてくださらないのか分からないのです。

ヨブは、神様の沈黙があまりにも長く続くので、次第に神様に対して不信感を持つようになっていったのです。自分は正しく歩んでいるのに、神様が私に正しく関わってくださらない、そうしてヨブは、神様よりも自分を正しいと考えるようになっていったのです。

そのような中で、ヨブの前に「エリフ」という人物が現れます。エリフは、ヨブと三人の友人たちとの討論をずっと聞いていました。ずっと聞いている中で、エリフは段々と怒

りを覚えてきたのです。それは、ヨブが神様よりも自分を正しいと考えるようになったからです。そうしてエリフは、32-37章まで、三人の友人たちやヨブに向かって言葉を語るのです。そのエリフの言葉に対して、ヨブは何も言い返すことができないのです。

今日の聖書箇所 34 章でも、エリフは三人の友人たちとヨブに対して語っています。5-9 節を見てみましょう。「ヨブはこう言っているからだ。『私は正しい。神が私の正義を取り去ったのだ。私の正義に反して、私は偽りを言えるだろうか。背きがないのに、私の矢傷は治らない。』ヨブのような人がほかにいるだろうか。彼は嘲りを水のように飲み、不法を行う者どもとよく交わり、悪人たちとともに歩む。彼は言っている。『神に喜ばれようとしても、それは人の役に立たない』」。

エリフは、ヨブが神様よりも自分を正しいと考えていることを問題にしています。神様が自分の正しさを無視する、自分は正しく歩んでいるのに神様が苦しみに遭わせる、それなら神様の前に正しく歩んでも意味がない、そのように神様を批判的に見ることを問題にしているのです。結局、神様よりも自分を正しいと考えることは、神様に従わない悪人たちと何も変わらないとエリフは言うのです。

#### 4. エリフが見る神

神様よりも自分を正しい、また自分は正しく、神様は正しくないとするヨブに対して、エリフは 10-30 節で、神様の正しさについて語っていきます。

エリフは、神様は決して悪を行わず、公正な方である、神様は人の行いに応じて報いをされ、それぞれの道に従って取り扱われる方であると言います。また、神様は全世界を造られた創造者であり、全世界を治めておられる統治者である、また人の命を支配され、神様が御手の業を止められたら、たちまち人は土に帰ってしまうと言います。そのような神様に対して、あなたは間違っている、あなたは正しくない、ひとり人間が果たして言えるだろうかと言います。

またエリフは、正義と憐れみに満ちておられる方で、決してえこひいきはなさらないと言います。地位の高い人を重んじて、貧しい人を軽んじられる方ではなく、弱い者の叫びを聞き、苦しむ者たちの叫びを聞き入れられる方であると言います。またどんな権力者であっても、神様を恐れず、神様に従わない者を必ず裁かれると言います。

21 節には、「神の御目が人の道の上であり、その歩みのすべてを神が見ておられるからだ」とあります。誰も神様の目から逃れることはできません。神様は、私たちの歩みのすべてを見ておられるのです。私たちが人の目を盗んで行なった悪いことも、私たちが人知れず行なった良いことも、神様はすべてを見ておられるのです。

23-24 節には、「神は人について、それ以上調べる必要はない。さばきのときに、神の前に出させてまでして。神は力ある者を、取り調べなしに打ち滅ぼし、彼らに代えて他の者たちを立てられる」とあります。神様には、人間社会などで行なわれる「取り調べ」をする必要はないのです。神様はすべてを見ておられ、知っておられるので、御自身の正義に従って、公正なさばきをされるのです。

このようにエリフは、神様は全世界と全人類の創造者であり、統治者であり、人間社会を正義と憐れみによって公正に裁かれる全知全能の神であると言うのです。そしてヨブに向かって、29節でこう言います。「**神が黙っておられるなら、だれがとがめることができるだろうか。神が御顔を隠しておられるなら、だれが神を認めることができるだろうか。一つの国民においても、一人の人間においても同様だ**」。その偉大な神様がたとえ沈黙したとしても、たとえ御顔を隠されたとしても、私たち人間は誰も文句は言えないはずだと言うのです。

## 5. エリフのヨブへの勧め

それゆえエリフは、ヨブが31-32節のような言葉で悔い改めることを求めます。「**私は懲らしめを受けました。私はもう悪いことはいたしません。私が見ていないことを、あなたが私に教えてください。私が不正をしたのでしたら、もういたしません**」。ヨブの問題は、神様よりも自分を正しいとしたことです。神様よりも自分を正しいとする時、33節のようなことが起こります。「**あなたが反対するからといって、神はあなたの願うとおりに報復されるだろうか**」。つまり、神様を自分の願いに従わせようとすることです。

私たちには、神様よりも自分が正しいとするか、それとも自分よりも神様が正しいとするか、二つの道があります。また自分に神様を従わせるか、それとも自分が神様に従うか、二つの道があります。33節でエリフは言います。「**私ではなく、あなたが選ぶがよい**」。私たちは、どちらか選ばなければなりません。神様よりも自分を正しいとするか、それとも自分よりも神様を正しいとするか、また自分に神様を従わせるか、それとも自分が神様に従うか。それによって私たちの生き方は大きく変わってきます。

## おわりに

私たちの人生にも、ヨブのように、突然の災いに襲われることがあります。その時、神様は沈黙されることもあります。御顔を隠されることもあります。なかなか状況が改善されないこともあります。その時に、私たちの信仰が問われます。私たちには、神様が正しいとするか、自分が正しいとするか、二つの道があります。神様が正しいとするなら、その災いにも神様の目的と意味が必ずあると信じることができます。イエス様を信じ、神様の子どもとされている私たちには、この災いにも神様の愛と恵みが込められていると信じることができるのです。すべては無駄にならず、すべてが益となると信じることもできます。神様の沈黙の中でこそ、私たちの信仰が問われるのです。神様の沈黙の中でこそ、神様を神様としてあがめていきたいものです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは全知全能の神であり、創造者であり、すべての統治者です。また正義と憐れみに満ちた方です。私たちは、あなたに造られ、いのちの息を吹き込まれた者に過ぎません。私たちの罪の根源は、自己中心にあります。自分を正しいとし、自分があなたを選ぶ

ことができるかのように考えてしまいます。しかしあなたこそ、正しく、私たちはあなたに選ばれた者に過ぎません。どうか試練の中で、たとえあなたが沈黙されたとしても、あなたへの信頼をなくすことがありませんように。どうか私たちの信仰をお守りください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。